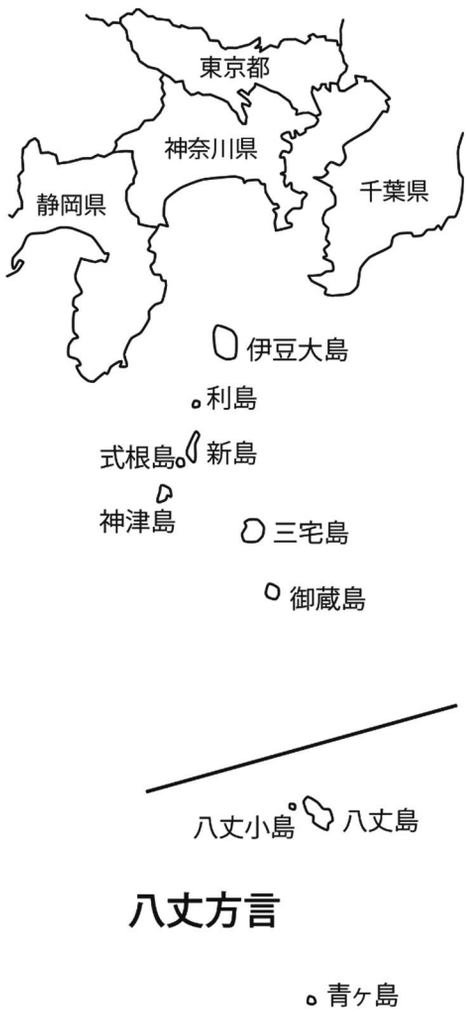
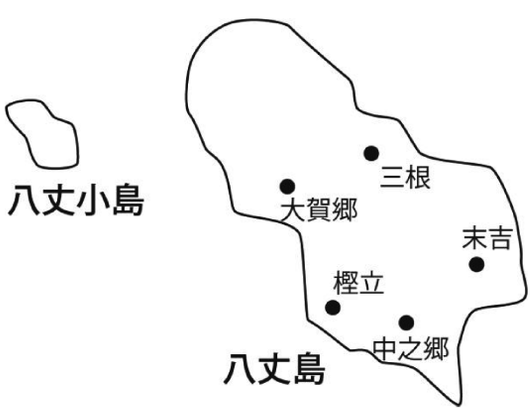
東京都八丈島三根方言



東京都島嶼部（伊豆諸島）方言区画図



調査地点図

【東京都の島嶼部の方言区画と八丈方言圏】東京都の方言は島嶼部の方言とそれ以外の本土の方言とにわかれるが、島嶼部伊豆諸島の中でも御蔵島と八丈島との間に大きな方言境界があり、八丈方言と本土の東京方言を含むそのほかの方言とをわけている。八丈方言は御蔵島以北の伊豆諸島諸方言や本土の東京方言とは大きく異なるものであり、御蔵島以北の方言が東部方言の下位分類である関東方言に属するものとされるのに対し、八丈方言は、東部方言、西部方言、九州方言の大分類と対立し、日本語本土方言を構成する四分類の一つとして扱われる。また、伊豆諸島の南方にある小笠原諸島でも八丈方言は部分的に話されているが、英語・ハワイ（カナカ）語・日本語・八丈方言のクレオールであることから、青ヶ島と小笠原諸島との間に方言境界が引かれる。

【八丈島について】　八丈島は東京の南方約 287km に位置し、西山（八丈富士、854m）と東山（三原山、701m）の二つの火山が接合した北西-南東 14km、北東-南西 7.5km のひょうたん型をした島で、面積は山手線の内側とほぼ同じである。行政区画では東京都に属し 2 島で 1 町を形成する。暖流である黒潮の影響を受けた海洋性気候で、「常春の島」とも言われている。

八丈島の集落は、かつて交通の難所であった大坂峠を挟んで坂上と坂下に二分され、さらに、坂下の三根・大賀郷と、坂上の樫立・中之郷・末吉の 5 集落に分けられる。島全体の人口は 7,500 人弱、約 4,400 世帯が暮らしているが、坂下を中心に島外出身者の割合が多い。かつては坂上の中之郷・樫立が島の中心であったが、現在は坂下の大賀郷や三根に中心が移っており、人口の大半は坂下に集中している。町役場や空港など、島の主な施設はこの地域にある。

八丈島には羽田空港から 1 日 3 便の航空便が出ており、片道 55 分ほどである。しかし、八丈島空港は接近が難しく、気象条件がそろわないと欠航も珍しくない。竹芝桟橋からは大型客船が 1 日 1 往復運航されているが、八丈島と本土との間には黒潮が流れているため、片道 10 時間ほどかかる。八丈島はこの

黒潮によって長年本土と隔てられてきたため、慶長5 年に宇喜多秀家が配流されて以降、明治初期まで長らく流刑の地であった。

八丈島のさらに南方約68km 沖、本土から約360km 南方には伊豆諸島最南端の島である青ヶ島が位置している。二重カルデラを持つ火山島で、青ヶ島へは本土からの直行便はなく、八丈島から連絡船かヘリコプターで向かうことになる。連絡船は欠航が多く、ヘリコプターは収容人数が限られているため、往来には現在でも困難が伴う。人口は170 人ほどであり、島外出身者の割合も高い。1785 年の噴火で全島民が八丈島に避難し、帰還には約50 年を要したという歴史を経て、現在に至っている。東京都に属し、1 島で1 村を形成する。

【八丈方言および八丈島三根方言について】八丈方言は萬葉集巻14・20 にある東歌・防人歌との間に文法的共通点がみられることから、古代日本語東国方言の流れを汲むものであると考えられている（北条1966、金田2001、2011 等）。東国方言は奈良時代には既に中央語から分岐しているため、八丈方言もそれ以前に中央語と分岐したものであると考えられる。八丈方言は「他の本土方言との直接の関連がみられない」ものであり、「八丈方言は姉妹方言と呼べるものがなく孤立しているという点で、琉球諸方言とは状況が大きく異なる」（金田 2011）が、日本語本土方言と対立する姉妹語として、琉球諸語以外では唯一のものとして学術的価値がある。

現在、八丈方言は八丈町内の5 集落に青ヶ島村を合わせ6 つの地域で話されており、坂下の三根と大賀郷、坂上の樫立と中之郷がそれぞれ小グループを形成し、坂上の末吉と青ヶ島がそれぞれ単独で下位方言として対立する（金田 2001、2014）。なお、青ヶ島では話者はすでに10 人程度とみられ、話者の大半は八丈島に在住している。

集落ごとに語彙的・文法的な差異はある程度みられるが特筆すべきほどのものではなく、八丈方言の下位方言の違いを特徴づけるのは音韻で、特に長母音・二重母音の現れ方や口蓋化の有無などに差異がみられる（金田2001、2014）。

短母音は標準語と同じa、i、u、e、o の5 母音であるが、長母音は地区によって長母音のみであったり、長母音と二重母音の両方があったりする。これらは地区ごとに規則的な対応関係がある。また、音韻解釈上は同じであっても、音声的に違いがみられる場合がある。このような特徴が下位分類の目安となっている（金田 2014）。本稿で記述する三根方言には長母音と二重母音との区別があり、今日を三根ではkei、大賀郷ではkeː、坂上ではkiːのように発音する。話者の内省では知覚に明瞭な区別があるようだが、実際の発話では長母音と二重母音との対立が明瞭ではないことがしばしばある。

現在、伝統的な八丈方言を話せる話者は八丈島では500 人程度、青ヶ島では10 人弱であり、その大半が70 代以上であろうとみられている。老年層が八丈方言を維持している一方で、壮年層以下の大半は八丈方言を理解できても話すことはできない、あるいはさらに若い世代では理解することや聞き取り自体も難しい、というのが現状である。十数年もすれば話者は半減し、言語継承がより難しくなり、言語を維持すること自体ができなくなるだろう。また、言語を維持するための伝統的な社会的基盤が弱体化していくことが、八丈方言自体の消滅につながる可能性もある。八丈方言の記録・保存ができる期間はもはやわずかであり、話者が十分に確保できるうちに早急に調査し、記録・保存することが喫緊の課題である。併せて言語継承活動の必要性が高まっている。

八丈島・青ヶ島以外でも、かつて八丈島からの集団移住が行なわれた東京都の小笠原諸島や沖縄県の南大東島・北大東島には戦前からの移住者が現在もおり、体系的なものでないが、古い語形などが残っている（金田2014）。

小笠原諸島では、定住の初期から接触言語が存在していたことが想定されている（ロング 1998）が、現在も、日本語・英語・ハワイ語・八丈方言が交じり合ったことば「小笠原混合語」が話されていると報告されている（ロング・橋本 2005）。そこには八丈方言の影響がみられるが、津田（1998）によると「全体的に言えることは八丈島の方言、特にその中でも三根方言から最も強く影響を受けているようである」とのことである。

小笠原諸島には元々、欧米系・太平洋諸島系の島民が入植していたが、江戸時代末期に幕府による入植政策が始まり、明治に入ってから本格的な移住が再開された。八丈島のほか、沖縄や焼津・清水など

の漁港地からの移民は年を追って増加し、30 余りの島々のうち、14 の島々に人々が済むようになった（津田 1988、ロング・橋本 2005）。太平洋戦争末期には欧米系を含むすべての島民の本土への集団疎開が行なわれ、戦後、欧米系島民 129 人が帰島したが、1968 年に小笠原諸島返還協定が発効されると、旧島民が帰島を始めた。その結果、小笠原諸島では八丈方言、日本語、カナカ語（ハワイ語）、英語が混在することとなり、様々な言語が混在することとなった。

ただ、小笠原諸島と南北大東島で話されているのは、金田（2014）によれば、「（話者の）世代が日常よく使用したような表現にかぎられ」ており、また「八丈語を多少なりとも保存しているのは現在ではそれぞれ 1 桁程度」で「極めて断片的」であるという。

なお、このほか、かつては八丈島の属島である八丈小島でも話されていたが、1969 年に本島への移住事業が行われたため現在小島は無人となっている。しかし、八丈小島の鳥打・宇津木両地区の出身者が現在も八丈島本島に在住しており、かつての鳥打・宇津木両方言の面影をみることはできる。

【表記について】 本稿で記述する三根方言には「オー」と「オウ」、「エー」と「エイ」など、長音と二重母音との対立があるため、これらを書き分けているが、音声実現の際には長音化していることもしばしばあるため、原則、話者の内省に従って記述している。音韻的には共通語とほぼ同じであるため本稿ではカナで記述したが、/ je /は「イェ」と表記した。話者により語中で[ŋ]が観察されることもあるが、弁別的なものではないので、特にかき分けず破裂音と同様「ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ」のように記述する。

【調査概要】 本稿では、筆者の臨地調査で得た八丈島の三根地区の 1938（昭和 13）年生まれの女性をインフォーマントとする臨地調査で得た用例を中心に、金田（2001）をはじめ、飯豊毅一（1959）、平山輝男（1965）、大島一郎編（1986）など先行研究も参照して記述する。併せて、三根地区の 1939（昭和 14）年生まれの女性への調査データや先行研究の記述を参考にする。用例は、特に注記がない限り、1938 年生まれのインフォーマントのものである。引用元の記載のあるものは用例出典に記載した文献からのものである。なお、引用に際し表記を私に改めた。

東京都八丈島三根方言の活用表

《動詞》

		多段型　書く	一段型　見る	来る	する
終止類	断定非過去	カコワ カコジャ	ミロワ ミロジャ	クロワ クロジャ	ショワ ソワ ショジャ ソジャ
	断定過去	カカラ カカララ	ミタラ ミタララ	キタラ キタララ	シタラ シタララ
	命令	カケ	ミロ	コ コー	シェ セー
	禁止	カクナ	ミルナ △ミナ	クナ コナ	スナ
	意志	カコウ	ミロウ	クロウ	ショウ
	推量	カクノウワ	ミルノウワ ミノウワ	クルノウワ クノウワ	スルノウワ スノウワ
接続類	連体非過去	カコ	ミロ	クロ	ショ スロ
	連体過去	カコー カカロー	ミトー ミタロー	キトー キタロー	シトー シタロー
	中止	カイテ カッテ カキ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カカーバ △カカバ カキャ カケバ	ミターバ △ミバ ミラバ ミリャ ミレバ	キターバ △コバ クラバ クリャ クレバ	シターバ △サバ セバ スリャ スレバ
派生類	否定	カキンナカ カキンネー カキンノージャ カキンナキャ カキンナイ	ミンナカ ミンネー ミンノージャ ミンナキャ ミンナイ	キンナカ キンネー キンノージャ キンナキャ キンナイ	シンナカ シンネー シンノージャ シンナキャ シンナイ
	丁寧	カキイタソワ	ミイタソワ	キイタソワ	シイタソワ
	使役	カカセロワ	ミサセロワ	コサセロワ	サセロワ
	受身	カカレロワ	ミラレロワ	コラレロワ	サレロワ
	可能	カカレロワ カケロワ	ミラレロワ ミレロワ	コラレロワ コレロワ クレロワ	サレロワ
	尊敬	カキヤロワ	ミヤロワ	キヤロワ	シヤロワ
	継続	カキタール カイタール	ミタール	キタール	シタール
	希望	カキタキャ カキテー	ミタキャ ミテー	キタキャ キテー	シタキャ シテー
	のだ	カコダラ	ミロダラ	クロダラ	ソダラ ショダラ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例		活用形例（中止形）	作り方
k	書く	kak・o	カイ-テ カッ-テ	k を i または Q（促音）にする。
g	泳ぐ	ojog・o	オヨン-デ	g を N（撥音）にする。-テが-デになる。
s	出す	das・o	ダシ-テ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ	tat・o	タッ-テ	c を Q（促音）にする。
n	死ぬ	sin・o	シン-デ	n を N（撥音）にする。
b	飛ぶ	tob・o	トン-デ	b を N（撥音）にする。
m	飲む	nom・o	ノン-デ	m を N（撥音）にする。
r	切る	kir・o	キッ-テ	r を Q（促音）にする。
w/ø	買う	ka(w)・o	カッ-テ	w/ø を Q（促音）にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か（だ）	学生（だ）
終止類	断定非過去	アカキャ アカケジャ アケー	シズカダラ シズカドージャ	ガクセイダラ ガクセイドージャ
	断定過去	アカカララ	シズカダララ	ガクセイダララ
	推量	アカカンノウワ	シズカダンノウワ	ガクセイダンノウワ
接続類	連体非過去	アカケ	シズカドー	ガクセイドー
	連体過去	アカカロー	シズカダロー	ガクセイダロー
	中止	アカクテ	シズカデ	ガクセイデ
	仮定	アカカーバ アカカラバ	シズカダーバ シズカダラバ	ガクセイダーバ ガクセイダラバ
派生類	否定	アカクネー アカクナッキャ	シズカジャナカンネー シズカジャナッキャ	ガクセイジャナカンネー ガクセイジャナッキャ
	なる	アカクナロワ	シズカニナロワ シズカンナロワ	ガクセイニナロワ
	丁寧	アカクオジャロワ	シズカデオジャロワ	ガクセイデオジャロワ
	のだ	アカケドーダラ	シズカドーダラ	ガクセイドーダラ

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」)と基幹一段型（以下「一段型」）がある。おおよそ、多段型には a 類（「書く」・「居る」・「死ぬ」類）動詞、一段型には b 類（「見る」・「起きる」・「開ける」類）動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オ段の 5 形、および、音便形がある。融合によってア段拗音となることもある。「カク」（書く）の場合、断定過去カカ-ラ（kak･a-ra）、否定カキ-ンナカ（kak･i-N-naka）、推量カク-ノウワ（kak･u-nouwa）、可能カケロワ（kak･e-rowa）、断定非過去カコワ（kak･o-wa）、継続カイタール（kai-taRru）、仮定カキャ（kak･ja）など。また、語幹末子音には k（カ行）、g（ガ行）、s（サ行）、t（タ行）、n（ナ行）、b（バ行）、m（マ行）、r（ラ行）、w（ワ行）がある。語例は表「多段型動詞の基幹音便形」を参照。

一段型にはミ-ロ（mi-ro）、オキ-ロ（oki-ro）など基幹がイ段の動詞と、ネ-ロ（ne-ro）、アケ-ロ（ake-ro）など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は「ミル」を例にすると、断定非過去ミ-ロワ（mi-rowa）、命令ミ-ロ（mi-ro）、禁止ミ-ルナ（mi-runa）、推量ミル-ノウワ（mi-runouwa）、連体非過去ミ-ロ（mi-ro）、

仮定ミ-ラバ（mi-raba）、ミ-リャ（mi-rja）、ミ-レバ（mi-reba）、受身ミ-ラレロワ（mi-rarerowa）、可能ミ-レロワ（mi-rerowa）、のだミ-ロダラ（mi-rodara）のように活用する。

不規則な活用をする動詞に「クル」（来る）と「スル」（為る）がある。ともに一段動詞に近い活用をするが、「クル」は、キ-タラ（k･i-tara）、ク-ロワ（k･u-rowa）、コ-レロワ（k･o-rerowa）などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の 3 段に、「スル」はサ-レロワ（s･a-rerowa）、シ-タラ（s･i-tara）、ス-ルノウワ（s･u-runouwa）、セ（s･e）、ソワ（s･o-wa）などのように、基幹が「サ」「シ」「ス」「セ」「ソ」の 5 段にわたる。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

断定非過去形は連体非過去形に終助詞「ワ」または「ジャ」が付いた形で現れる。しかし、断定非過去形では終助詞「ワ」「ジャ」と切り離して使用することはできないため、金田（2001）に従い、ここでは一つの語形として扱う。なお、「する」は「ショワ」「ショジャ」として現れることが多いが、「ソワ」「ソジャ」として現れることもある。

・テガミョ　カコワ。（手紙を書く。）
・アラ　ヒンビン　テレビョ　ミロワ。（私は毎日テレビを見る。）
・ハラ　スグ　ハナコガ　クロジャ。（もうすぐ花子が来る。）
・マンカラ　シゴトウ　ショワ。（今から仕事をする。）

〈断定過去形〉

断定過去形は、多段型動詞は基幹ア段形、一段型動詞は基幹に「タ」を付した形、「来る」「する」は「キ」「シ」に「タ」を付した形に、それぞれ「ラ」を接続した形で現れる。カカラは、カキアロが終助詞「ワ」との融合を起こした結果、成立した形である。

・テガミョウ　カカラ。（手紙を書いた。）
・キネイ　テレビョ　ミタラ。（昨日テレビを見た。）

以上は現在の結果を含む過去を表すが、現在の結果を含まず相対的に遠い過去をあらわすものとして多段型動詞は基幹ア段形に、一段型動詞は基幹に「タ」を付した形に、「来る」「する」はイ段形「キ」「シ」に「タ」を付した形に、それぞれ「ララ」が接続した形が現れる。

・ワカケ　トキャ　ヨク　テガミョウ　カカララ。（若い時はよく手紙を書いた。）
・ネッコケコロワ　ヨク　ヘンドウ　ユメイミタララノー。（小さい頃はよく変な夢をみたよ。）
・マニャ　トキドキ　ユメイ　ミロダイドー、ムカシワ　ゼンゼン　ミンナカララ。（今は時々夢をみるけれど、昔は全然見なかった。）

なお、現代八丈方言ではまず使用されないが、金田（2001，2018 ほか）によると、過去の「キ」に由来する語形が存在する。

・ウクデ　ウイト　ノマッチー。（あそこで、あの人と飲んだっけなあ。）［基］
・アガ　カコ　シュングリ　ウイガ　ケシチガー。（私が書くとすぐ順々に、あいつが消したっけなあ。）［基］

〈命令形〉

命令形は多段型動詞では「カケ」などエ段形で、一段型動詞では基幹に「ロ」を付した形、「来る」は基幹オ段形で「コ」または、オ段長音形で「コー」、「する」は基幹エ段拗音形「シェ」で現れることが多いが、話者により「セー」という語形で現れることもある。

・モーミン　テガミョウ　カケ。（早く手紙を書け。）
・ヒンビン　ニュースウ　ミロ。（毎日ニュースを見ろ）
・マンカラ　ココン　{コ／コー} ヨー。（今からここに来なさい）
・ハイク　シゴトウ　{シェ／セー}。（早く仕事をしなさい。）

〈禁止形〉

多段型動詞と「する」は基幹のウ段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」は基幹のウ段またはオ段形に、それぞれ「ナ」を接続する。ただし、本調査では「見る」は古い終止用法とみられるイ段形（連用形）mi を用いた「ミナ」という形はあまり使われず、代わりに ru を伴う「ミルナ」という形が専ら使用されて

いる。

・キッタナケ　オツドウ　ジョ　カクナ。(汚い悪い字を書くな。

・オツドウ　バングミョ　{ミルナ／ミナ} ヨ。(くだらない番組を見るな（よ)。)

・アシタワ　コケイ　{クナ／コナ} ヨー。(明日はここへ来るな（よ)。)

〈意志形〉

意志形は、多段型動詞は基幹オ段形に「ウ」を接続する。一段型動詞は基幹に「ロウ」を、「来る」は基幹ウ段「ク」に「ロウ」を付す。「する」は「ショウ」となる。

・ハー　ケーロウ。(もう帰ろう。)［基］

・アイモ　ノモウ。(私も飲もう。)［基］

・アスモ　クロウ。(明日も来よう。)［基］

また、八丈方言では意志と勧誘とは異なる語形で区別されており、「ウ」の代わりに「ゴン」を付すことで勧誘形を作ることができる。

・テガミョ　カコゴン。(手紙を書きましょう。)

・マンカラ　テレビョ　ミロゴン。(今からテレビを見ましょう。)

・ノウ　ココゲー　クロゴン。(またここに来よう。)

〈推量形〉

多段型動詞は基幹のウ段に、一段動型詞は基幹に「ル」を付して、「来る」「する」は基幹、または基幹に「ル」を付した形に、それぞれ「ノウワ」を接続する。

・タローガ　テガミョ　カクノウワ。(太郎が手紙を書くだろう。)

・ハナコガ　ハー　スグ　ココン　クルノウワ。(花子がもうすぐここに来るだろう。)

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、多段型動詞はオ段形、一段型動詞は基幹（＝語幹）にロを付した形、「来る」はウ段形「ク」にロを付した形となる。「する」はオ段拗音形「ショ」で表されることが多いが、ウ段形「ス」に「ロ」を付した形で表されることもある。

・ジョ　カコトキ　イェンピツー　ツカオワ。(字を書く時鉛筆を使う。)

・アガ　イェイ　ミロ　シタ　ガ　アル。(私の家を見る人がいる。)

・ハナコガ　クロ　ヒョ　オセイテ　タモウレ。(花子が来る日を教えてください。)

〈連体過去形〉

多段型動詞は基幹オ段形を長音化した形で表される。一段型動詞は基幹に、「来る」「する」は基幹イ段形に、それぞれ「トー」を接続することで表す。

・コノ　ホンヨ　カコー　シトン　アワラ。(この本を書いた人に会った。)

・テレビョ　ミトー　シトカラ　レンラクガアララ。(テレビを見た人から連絡があった。)

・キネイ　シゴトウ　シトー　シト。(昨日仕事をした人。)

・キネイ　ミンナロー　シクデーヨ　ミテケロワ。(昨日みなかった宿題をみてあげるよ。)

また、古形として、「カカロー」「ミタロー」「キタロー」「シタロー」のように、断定過去の「ラ」を「ロー」に替えた形が存在する。

・ホラ　ウクデ　カマロージャ　フタリデ。(ほら、あそこで食べたじゃないか、二人で。)

・イツカ　ミタロー　シト。(いつか見た人。)

〈中止形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹に、「来る」「する」ではイ段形「キ」「シ」に、それぞれ「テ」を接続する。

・ハナコガ　ブンヨ　{カッテ／カイテ)、タロー　ガ　イェゾウ　カカラ。(花子が文を書いて、太郎が絵を描いた。)

・トンメテイワ　ニュースー　ミテ、　ヒルワドラモウ　ミロワ。(朝はニュースを見て、昼はドラマを見る。)

・サキー　ハナコガ　キテ、ソイカラ　タローガ　キタラ。(先に花子が来て、それから太郎が来た。)

・マンカラ　シゴトウ　シテ、ソイカラ　ヨウケイ　カンダ。(まず仕事をして、それから夕食を食べた。)

なお、坂上の方言では多段型動詞の場合でも「トピテ(駆けて)」のように音便化しないものがあるが、金田（2018）によれば、この場合「ピ」が無声化している。

このほか、多段型は基幹イ段形、一段型は基幹、「来る」「する」はイ段形の「カキ」「ミ」「キ」「シ」

のような形で表されることがある。

〈仮定形〉

伝統的には「カカバ」「ミラバ」「クラバ」「サバ」などで、多段型動詞と「する」は基幹ア段形、一段型動詞と「来る」は基幹に「ラ」を付した形に、それぞれ「バ」を接続する。

・ウヌモ　イカバ　コレイ　モッテ　イケ。(おまえも行くならこれを持っていけ。)［基］

・コノ　バングミョ　ミラバ　カンゲーガ　コール　カモ　シレンナキャ。(この番組をみれば考えが変わるかもしれない。)

・ココン　{ネバ／ネラバ}　フトンヨ　スコワ。(ここに寝るなら布団を敷くよ。)［基］

ただし、本調査では「サバ」は使用されておらず、もっぱら「セバ」が使用されていた。

・ケイ　コノシゴトウ　セバ　アシタワ　ヤスメル。(今日この仕事をすれば明日は休める。)

また、「カカバ」も現在では用いられることは少なく、もっぱら「カカーバ」が用いられている。

・マンカラ　テガミョ　カカーバ　マニエウ。(今から手紙を書けば、間に合う。)

金田（2001）によると、本来、「カカバ」形は予定性がある未完了を表し、「カカーバ」形は予定性がない完了を表す、という対立があったようである。標準語にすると、「カカバ」は「書くなら」に相当し、「その予定なら、そのつもりなら」となるが、「カカーバ」は「書いたなら」に相当し、予定性がなく、より仮定的な表現である。

・ウヌモ　イカバ　コレイ　モッテ　イケ。(おまえも行くなら、これをもっていけ。)［基］

しかし、現在では未完了の「カカバ」形が衰退し、予定性の有無にかかわらず完了の「カカーバ」形で表されることがほとんどである。なお、先行研究では「ミバ」「コバ」という形式もみられるが、本調査の話者によると現在では使用しないとのこと。

・ウイモ　{コバ／クラバ}　ウヌモ　ドウシン　コ。(あいつも来るならおまえも一緒に来い。)［基］

このほか、「カケバ」「ミレバ」「クレバ」「スレバ」のように多段型動詞は基幹エ段形、一段型動詞と「来る」「する」は基幹に「レ」を付した形に、それぞれ「バ」を接続する語形、「カキャ」「ミリャ」「クリャ」「スリャ」のように多段型動詞は基幹ア段拗音形、一段型動詞と「来る」「する」は基幹に「リャ」を接続した語形も併用されている。

・マンカラ　クレバ　マニエウ。(今から来れば間に合う。)

・アキン　{ナリャ／ナレバ}　カンモガ　カメロワ。(秋になればサツマイモが食べられるよ。)［基］

〈否定形〉

この方言では、否定形はア段形（未然形）ではなくイ段形（連用形）をもとにして作られる。多段型動詞はイ段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」「する」はイ段形「キ」「シ」に、それぞれ「ン」を付し「ナカ」「ノージャ」「ナキャ」「ナイ」「ネー」が接続する。このうち、「ナキャ」は比較的新しい方言のようである。

・テガミョ　カキンナイ。(手紙を書かない。)

・ワラ　ネテモ　ユメイワ　ミンナカ。(私は寝ても夢は見ない。)

・ケイワ　シゴトウ　シンナキャ。(今日は仕事をしない。)

また、話者の内省では「ナカ」「ナイ」は比較的丁寧で、「ネー」は乱暴な言い方とのことである。

・テガミョ　カキンネー。(手紙を書かない。)

これらのほかに「ナシ」が接続することもあるが、その場合は強調の意味が加わる。次の例は子音語幹動詞 kam（食べる）の否定形で、直訳すると「食べない」という意味だが、実際には食べないという事実が強調され、相手に対してその事実を指摘するような意味が加わる。

・カモワトッテイ　カミンナシ。(食べるといって食べない（じゃないか)。)。

過去を表す場合は「ナカララ」または「ナララ」を接続する。

・ムカシワ　テガミョー　{カキンナカララ／カキンナララ}。(昔は手紙を書かなかった。)

・マニャ　トキドキ　ユメイ　ミロダイドー、ムカシワ　ゼンゼン　{ミンナカララ／ミンナララ}。(今は時々夢をみるけれど、昔は全然見なかった。)

このほか、現在ではあまり使われないが、「ジャララ」を接続する古い形がある。

・キネイワ　メズラシク　ユメイワ　ミンジャララ。（昨日は珍しく夢は見なかった。）

・シッカリ　イコオテ　スワレンジャララ。（たくさんいったから座れなかった。）［飯］

・ヨクコソ　イキンジャラレ。（行かないで良かった。（係助詞「コソ」に対して結びが已然形になっている。））［飯］

否定推量形は「ナンノウワ」を接続することで表す。

・ケイワ　ユメイワ　ミンナンノウワ。（今日は夢を見ないだろう。）

〈丁寧形〉

八丈方言では全国共通語のデス・マスのような丁寧形専用の形式が存在しないため、謙譲動詞だったものを補助動詞化して用いる。また、尊敬表現からの語彙的な丁寧化により作られた動詞が並存しており、金田（2001）で「omi 動詞」と呼ばれる、同等かその前後の人に対して用いられる尊敬動詞が、事実上、丁寧形に準じるものとして存在している。

謙譲動詞を補助動詞化した場合、共通語の補助動詞「致す」にあたる「イタソワ」を動詞に接続することで、丁寧さを表現する。ただし、主語に制限があり、話し手か話し手側の第三者が主体の場合に用いられ、聞き手や聞き手側の第三者が主体の場合には用いられない。物や自然現象についても用いられるが、物の場合、それが聞き手のものであっても話し手のものであっても使用が可能である。

この場合、多段型動詞と「来る」「する」はイ段形に、一段型動詞は基幹に、それぞれ「イタソワ」が付く。「イタソワ」形は多段型に準じた活用をする。

・アガ　テガミョ　カキイタソワ。（私が手紙を書きます。）

・ワレワ　マイシューマツ　シベーヨ　ミイタソワ。（私は毎週末芝居を見ます）。

・サメシク　ナリイテータラ。（寂しくなりました。）［基］

・アメガ　フリイタソジャ。（雨が降りますね。）［基］

omi 動詞としては、「ゴウジロワ（見る＝ミロワ）」「ワソワ（いる・来る・行く＝アロワ・クロワ・イコワ」「メーロワ（食べる＝カモワ）」「ヤドロワ（寝る＝ヤスモワ）」「オスナロワ（言う＝ヨワ）」「ゴウジロワ（見る＝ミロワ）」「タボワ（くれる＝ケロワ）」「モーセロワ（やる＝ケロワ）」などがある。

・コレイ　メーロカ？（これを食べますか？）［基］

・モテギサンワ　クニー　ワスカモ　シレンナカ。（モテギさん（人名）はクニ（本土）へ行きますかもしれないよ。）

なお、聞き手や聞き手側の第三者が主体の場合、丁寧形は用いず、一般に尊敬形式の「シヤロワ」が尊敬の意味で用いられる。

〈使役形〉

多段型動詞と「する」はア段形に「セロワ」を接続する。一段型動詞と「来る」はそれぞれ基幹と「コ」に「サセロワ」を接続する。活用は一段型動詞に準じる。

・テンデデ　ナメーヨ　カカセロワ。（自分で（各自で）名前を書かせる。）

・ハナコン　トリデ　ニュースウ　ミサセロワ。（花子に一人でニュースを見させる。）

・ハナコウ　ココゲー　コサセロワ。（花子にここに来させる。）

・タローニ　トリデ　シゴトウ　サセロワ。（太郎に一人で仕事をさせる。）

〈受身形〉

多段型動詞と「する」はア段形に「レロワ」が接続し、一段型動詞は基幹に、「来る」は「コ」に「ラ」を付し、「レロワ」が接続することで受身形を作る。断定非過去と同様、終助詞「ワ」が融合しているので分離せず記述する。活用は一段型動詞に準じる。

・イェノ　ヘイニ　ビショウ　ドー　イェゾウ　カカレロワ。（家の塀に汚い絵を描かれる。）

・イソガシケ　トキン　イェーゲー　コラレロワ。（忙しい時に家に来られる。）

・ハナコン　コラレテ　メーワクダララ。（花子に来られて迷惑だった。）

・ブッコロンダ　トコウ　タローニ　ミラレタラ。（転んだところを太郎に見られた。）

〈可能形〉

「カケロワ」「ミレロワ」「コレロワ／クレロワ」「サレロワ」のように多段型動詞は基幹エ段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」は「コ」または「ク」に「レ」を付した形に、「する」は「サ」に「レ」を

付した形に、それぞれ「ロワ」を接続する。また、併用形として、「カカレロワ」「ミラレロワ」「コラレロワ」のように多段型動詞は基幹ア段形に「レ」を付した形に、一段型動詞は基幹「ラレ」を付した形に、「来る」は「コ」に「ラレ」を付した形に、それぞれ「ロワ」を接続する。なお、「する」はこれに相当する語形が見つからなかった。また、「する」の場合は「サレロワ」より、後述する能力可能を示す「ショウホーダラ」を使用することが多い。

・コノ　コワ　マダ　ネッコケンガ　エズケカンジョ　カケロワ。(この子はまだ小さいけれども、難しい漢字が書ける。)

・トンメテイニ　オキレバ　ヒノデガ　ミレロワ。(早朝に起きれば日の出が見られる。)

・ワレンモ　サレロワ。(私にもできるよ。)

なお、カコーホウダラ(実際の発音ではホーダラと発音されることも多い)という表現形式もあるが、能力可能の意味に限られる。

・ウノ　シトワ　エズケ　カンジョー　カコーホーダラ。(あの人は難しい漢字を書くことができる。)

・ソノ　イェーガワ　イェキメーノ　イェーガカンデ　ミレロワ(×ミロホーダラ)。(その映画は駅前の映画館で見られるよ。)

〈尊敬形〉

多段型動詞と「来る」「する」では基幹のイ段に、一段型動詞は基幹に、それぞれ「ヤロワ」を接続する。活用は多段型動詞に準じる。

・センセイガ　テガミョ　カキヤロワ。(先生が手紙をお書きになる。)

・オウサマガ　マルビヤッテ　サメシク　ナリヤロワノー。(おじいさまがお亡くなりになって寂しくおなりですねえ。)[基]

〈継続形〉

多段型動詞と「来る」「する」はイ段音便形に、一段型動詞は基幹に、それぞれ「タール」または「ダール」を接続する。なお、多段型動詞の場合、語によっては「カイタール(書く)」と「カキタール」のように音便化する場合と音便化しない場合とが併存している場合がある。

・キンギョガ　マルンダール。(金魚が死んでいる。)(maruN-daRru)

・タローガ　テガミョ　{カイタール/カキタール}。(太郎が手紙を書いている。)

・タローワ　キネイカラ　コノ　シゴトウ　シタール。(太郎は昨日からこの仕事をしている。)

また、「カイテアロワ」「ミテアロワ」「キテアロワ」「シテアロワ」のような表現形式も存在する。中止形に「アロワ」を接続する。

・メイテアロワ。(燃えているよ。)[基]

・コッチャン　キテアロゴンダラ。(こっちへ来つつあるようだ。)[基]

〈希望形〉

多段型動詞はイ段形に、一段型動詞は基幹に、「来る」「する」はイ段形「キ」「シ」に、それぞれ「タキャ」あるいは「テー」が接続する。形容詞に準じた活用をする。

・フデジャ　ナクテ、　イェンピツデ　{カキタキャ/カキテー}。(筆じゃなくて鉛筆で書きたい。)

・アラ　ヤキューチューケイヨ　ミタキャノー。(私は野球中継を見たいよ。)

・モウイチド　ウノ　ケシキョ　ミテーカ。(もう一度あの景色を見たいか。)

〈のだ形〉

多段型動詞、一段型動詞、「来る」は連体非過去形に、「する」の場合は「ショ」または「ソ」に「ダラ」を接続する。はたらきかけの意味で使用されることがあり、念押し的な終助詞「ヨウ」を伴うことが多い(金田 2001)。

・センセイニ　テガミョ　カコダラ。(先生に手紙を書くんだよ。)

・タローワ　トリデ　コノ　シゴトウ　ショダラヨウ。(太郎は一人でこの仕事をするんだよ。)

・ケイワ　オメイッキリ　アスボダラヨウ。(今日は思いっきり遊ぼうね。)[基]

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞の活用の種類は1つである。

〈断定非過去形〉

断定非過去形は語幹に「キャ」が接続した形であ

らわれる。しかし、本来は連体非過去形に終助詞「ワ」が接続したものであったと考えられ、アカケ＋ワが融合の結果「アカキャ」のような形になったと考えられる。金田（2001）では「動詞とちがって、形容詞は連体機能がもっとも基本的であり、形つくりの点でも連体形（あるいは連体=名詞形）が基本となっている」と述べられている。また、連体非過去形に「ジャ」が接続する形もあるが、融合はみられず「アカケジャ」のようになる。このほか、「アケー（赤い）」「サミー（寒い）」のように、語幹末母音が交替して長音化した形もある。

・ハナガ　アカキャ。（鼻が赤い。）
・ハナガ　アカケジャ。（鼻が赤い。）
・ハナガ　アケー。（鼻が赤い。）

〈断定過去形〉

断定過去形は「アカカララ」のように語幹に「カラ」を付し、「ラ」を接続する。

・ハナガ　アカカララ。（鼻が赤かった。）
・ワイモ　ムカシワ　アシガ　ハヤカララ。（私も昔は足が速かった。）

〈推量形〉

「アカカンノウワ」のように語幹に「カン」を付し、「ノウワ」を接続する。

・ハナガ　アカカンノウワ。（花が赤いだろう。）
・ウノ　ウマメワ　キット　アシガ　ハヤカンノウワ。（あの馬はきっと足が速いだろう。）

〈連体非過去形〉

連体非過去形は断定非過去形とは語形が異なり、語幹に「ケ」を接続する。

・アカケ　ハナ。（赤い花）
・アシガ　ハヤケ　シトワ　ウラヤマシキャノー。（足が速い人はうらやましいね。）

〈連体過去形〉

連体過去形は断定非過去形とは語形が異なり、語幹に「カ」を付し、「ロー」を接続する。

・キネイ　マデ　ワ　アカカロー　ハナ。（昨日まで赤かった花。）

〈中止形〉

「アカクテ」のように語幹に「ク」を付し、「テ」が接続するが、「テ」を伴わない「アカク」という語形もみられる。

・コノ　ハナワ　アカクテ、ウノ　ハナワ　シレー。（この花は赤くて、あの花は白い。）
・ウノ　センシュワ　アシガ　ハヤクテ　シュビモ　ウマキャ。（あの選手は足が速くて守備もうまい。）

〈仮定形〉

「アカカーバ」「アカカラバ」のように語幹に「カーバ」「カラバ」を接続する。先行研究では「アカカバ」の形もみられるが、最近では使われなくなってきており、本調査の話者は使用しないとのこと。

・モシ　ハラ　ミガ　アカカーバ　トロゴン。（もしもう実が赤ければ採りましょう。）
・マット　アシガ　ハヤカラバ、　ウレン　オイツケロンノー。（もっと足が速ければ、あいつに追いつけるのに。）

〈否定形〉

語幹に「ク」を付し、形容詞「ない」にあたる「ネー」や「ナッキャ」を接続する。「ネー」や「ナッキャ」の前に取り立て助詞が介在しうる。また、「ナシ」を接続する場合もある。

・マダ　ミガ　アカクネー。（まだ実が赤くない。）
・マダ　アカクナシ。（まだ赤くない。）
・マダ　アカクナッキャ。（まだ赤くないよ。）
・マダ　アカクワナシ。（まだ赤くはない。）
・マダ　アカクチャナシ。（まだ赤くはない。）

〈なる形〉

語幹に「ク」を付し、動詞「ナロワ」を接続する。

・ハー　スグ　ミガ　アカクナロワ。（もうすぐ身が赤くなる。）
・レンシューヨ　セバ、アシワ　ハヤクナロワ。（練習をすれば、足は速くなる。）

〈丁寧形〉

八丈方言では丁寧表現は文法的なカテゴリーとして成立していないため、敬体補助動詞の「オジャロワ」を用いて丁寧さを表す。「オジャロワ」は単独で「いる」「行く」「来る」の尊敬動詞として用いられるが、一方で共通語の「ございます」ように、形容詞や名詞述語の丁寧な形を表すことができる。

この場合、語幹に「ク」を付し、「オジャロワ」を接続する。

・マダ　ハヤクオジャロカノー。（（自分が出かけるのが）まだ早いですかねえ。）[基]
・キー　タカクオジャロワノウ。（ずいぶん高い

ですね。）

なお、金田（2001）によると、「オジャロワ」は「尊敬的にも謙譲的にも使用される点で丁寧的であり、普通はこれで十分なのだが、最高の敬意を表したいときに、その内容が聞き手に関わる場合は「オジャリヤロワ」を、話し手に関わる場合は「オジャリイタソワ」の形をとることがある」と述べられている。

・コンダノ　カンモワ　ンーマクオジャリイタソワ。（今年のサツマイモはおいしくございますよ。）［基］

・コイデ　ヨク｛オジャロカ／オジャリイタソカ｝。（これで良いですか。）［基］

〈のだ形〉

連体非過去形に「ドー」を付し、「ダラ」を接続する。

・コノ　トマトワ　ナカマデ　アカケドーダラヨー。カンデミヤレ。（このトマトは仲間で赤いんだよ。食べてごらんなさい。）

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

断定非過去形は、形容名詞・名詞に「ダラ」または「ドージャ」を接続する。「ダラ」の場合は終助詞を伴うことが多いが、この方言には男女による終助詞の表現の使い分けはない。

・コノ　ヘヤワ　｛シズカダラノー／シズカドージャ｝。（この部屋は静かだね。）

〈断定過去形〉

断定過去形は連体過去形とは語形が異なり、語幹に「ダラ」を付し、「ラ」を接続する。

・コノ　ヘヤワ　シズカダララ。（この部屋は静かだった。）

・キョネンマデワ　タローワ　ガクセイダララ。（去年までは太郎は学生だった。）

〈推量形〉

語幹に「ダン」を付し、「ノウワ」を接続する。

・ココヨリ　ムコーノホウガ　シズカダンノウワ。（ここより向こうの方が静かだろう。）

・タローワ　マダ　ガクセイダンノウワ。（太郎はまだ学生だろう。）

〈連体非過去形〉

連体非過去形は語幹に「ドー」が後接する。

・シズカドー　ヘヤ。（静かな部屋。）

・マンモ　ガクセイドー　ホウベイト　アワラ。（今も学生である友達と会った。）

〈連体過去形〉

連体過去形は断定過去形とは語形が異なり、「ダロー」を接続する。

・ハンズメマデ　シズカダロー　ヘヤガ　ソーガイシク　ナララ。（さっきまで静かだった部屋が騒がしくなった。）

〈中止形〉

「シズカデ」のように、語幹に「デ」が接続する。

・コノヘヤワ　シズカデ、　アノヘヤワ　ソーガシキャ。（この部屋は静かで、あの部屋は騒がしい。）

・タローワ　ガクセイデ、　ハナコワ　カイシャイン　ドージャ。（太郎は学生で、花子は会社員だ。）

〈仮定形〉

語幹に「ダーバ」、「ダラバ」、あるいは「ダリャ」を接続する。

・モーリガ　マット　シズカダーバ　ネムレルノウワ。（周りがもっと静かならば眠れるだろう。）

・タローガ　ガクセイダーバ　タノメンノージャノー。（太郎が学生ならば頼めないね。）

〈否定形〉

語幹に「ジャ」または「デ」を付し「ナカンネー」あるいは「ナッキャ」が接続する。

・コノヘヤハ　アンマリ　シズカジャナカンネー。（この部屋はあまり静かではない。）

・タローワ　ガクセイジャナッキャ。（太郎は学生ではない。）

〈なる形〉

語幹に「ニ」または「ニ」にあたる「ン」を付し、動詞「ナロワ」が続く。

・ハー　スグ　シズカンナロワ。（もうすぐ静かになる。）

・ウノヒトワ　ガクセイニナロワ。（あの人は学生になる。）

〈丁寧形〉

語幹に「デ」を付し、「オジャロワ」を接続する。

形容詞と同様、最高の敬意を表したいときには、その内容が聞き手に関わる場合は「オジャリヤロワ」を、話し手に関わる場合は「オジャリイタソワ」を接続することがある。

・ゲンキデ｛オジャロワ／オジャリイタソワ｝。（元気でございます。）[基]

・キー　シズカデオジャロワノー。（ずいぶん静かですね。）

・ザッシュデオジャリイタソワノー。（雑種でございますよ。）

〈のだ形〉

連体非過去形に「ドー」を付し「ダラ」を接続する。しばしば「ノー」が接続する。その場合、意味は「～なんだよね」というような柔らかい言い方となるが、話者によるとこの方が「ドーダラ」で言い切るよりも自然な表現であるとのこと。

・アッチノ　ヘヤガ　シズカドーダラノー。（あっちの部屋が静かなんだよね。）

・タローニャ　タノメンナカ。マダ　ガクセイドーダラ。（太郎には頼めない。まだ学生なんだ。）

用例出典

［基］：金田章宏（2001）『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院

［飯］：飯豊毅一（1959）「八丈島方言の語法」『国立国語研究所論集 1 ことばの研究』

参考文献

浅沼良次（1999）『八丈島の方言辞典』朝日新聞出版サービス

飯豊毅一（1959）「八丈島方言の語法」『国立国語研究所論集 1 ことばの研究』

大島一郎（1964）「伊豆諸島の方言区画」『日本の方言区画』東京堂

大島一郎（1980）『八丈方言の研究』東京都立大学国語学研究室

大島一郎（編）（1986）『南部伊豆諸島方言の記述的・社会言語学的研究』科研費研究成果報告書

大島一郎（編）（1987）『八丈島における言語変化―共通語化の側面を中心として』東京都立大学国語学研究室

金田章宏（2001）『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院

金田章宏（2011）「八丈方言――古代東国方言のなごり」呉人惠編『日本の危機言語　言語・方言の多様性と独自性』北海道大学出版会

金田章宏（2014）「東京都伊豆諸島八丈方言」『文化庁委託事業報告書　危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究』琉球大学国際沖縄研究所

金田章宏（2018）「八丈語の動詞形態論　古層の保持と変化」『国立国語研究所シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」』配布資料

木部暢子（編）（2013）『国立国語研究所共同研究　消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究　八丈方言調査報告書』国立国語研究所.

国立国語研究所（1950）『八丈島の言語調査』国立国語研究所

津田葵（1988）「小笠原における言語変化と文化受容」『Sophia Linguistica』23・24 号

平山輝男(1941a)「言語島八丈島と黒潮」『コトバ』3-4、国語文化研究所

平山輝男(1941b)「豆南諸島のアクセントとその境界線」『音声学協会会報』67,68

平山輝男（1965）『伊豆諸島方言の研究』明治書院

北条忠雄（1966）『上代東国方言の研究』日本学術振興会、丸善

ロング・ダニエル（1998）「小笠原諸島における言語接触の歴史」『日本語研究センター報告』第 6 号（特集『小笠原諸島の言語文化』）大阪樟蔭女子大学日本語研究センター

ロング・ダニエル、橋本直幸（編）『小笠原ことばしゃべる辞典―小笠原シリーズ 3』株式会社南方新社

（三樹陽介）